「脱法的な行為」大阪入れ替えダブル選

3 月 6 日のレポートで、毎日新聞 5 日社説「大阪知事・市長の策略　地方自治への二重の背信」を紹介した。二人の入れ替え出馬は、「住民をあまりにばかにした話」で、「一種の脱法行為ではないか」と。

続いて朝日新聞 9 日社説「住民不在の党利党略だ」もダブル選を批判し、立場の入れ替えは「脱法的な行為であることを両氏はどう考えているのか」と問う。10 日の天声人語でも、大阪入れ替えダブル選を取り上げている。

戦後しばらくは、知事や市長らが自分の判断で選挙を前倒しすることが可能だった。ライバルの準備が整わないうちに辞職し、選挙に持ち込む。勝てばもう 4 年間、トップの座を保つことができる。現職の特権であった▼

そんな自分勝手な行為をやめさせようと、1950 年代から 60 年代にかけて法改正がなされ、今の仕組みに落ち着いた。任期途中で選挙をして勝っても、首長でいられるのは残り任期だけである▼

強力な歯止めとなるはずだが、こんな抜け穴があったとは。大阪維新の会の松井一郎・大阪府知事と吉村洋文・大阪市長がそろって辞職した。知事と市長を入れ替えて選挙に立候補するという▼

同じポストでのダブル選挙と違い、任期切れに伴う選挙を今年秋にしなくてよくなる。府議選や市議選と同日の投票にして盛り上げ、維新の議員を増やす狙いもある。選挙テクニックとしては分からなくもないが、大義はあるだろうか▼

府と市の二重行政のムダをなくすため「大阪都」をつくるというのが維新の主張である。僅差とはいえ、2015 年の住民投票で否決された構想だ。それに再挑戦するための選挙というが、勝つまでジャンケンをすると言っているようにしか聞こえない▼

2019年(平成31年)
3月15日
金曜日

大阪ダブル選 構図固まる

市長選 自民、柳本元市議を擁立

大阪府知事・大阪市長のダブル選（4月7日投開票）で、自民党は市長選に柳本顕・元大阪市議（39）を擁立する方針を固めた。大阪維新の会と対決する「反維新」勢力の知事・市長候補が揃い、ダブル選の構図が固まった。公明党本部は、自民が擁立する知事・市長候補を推薦する方針だ。▼32面＝維新が公約

小西・柳本氏 公明府本部推薦へ

ダブル選は、大阪府の松井一郎知事、大阪維新の会代表と、大阪市の吉村洋文市長（同党幹事長）が任期途中で辞職し、知事・市長選に立候補する「クロス選」とする方針だ。

大阪ダブル選の構図

大阪維新の会

吉村洋文 大阪市長（現職）

松井一郎 知事（現職）

入れ替え

府知事選 4月7日告示

大阪市長選 4月7日告示

「反維新」（自民、公明など）

小西禎 元参議院議員

柳本顕 元市議

柳本氏は2015年5月に実施された大阪都構想の是非を問う住民投票で、反維新の中核を担った同年11月の大阪市長選に立候補したが吉村氏に敗れ、今夏の参院選大阪選挙区で自民公認で立候補する予定だった。柳本氏は14日夜、大阪市内で記者団に「立候補を決めた」と述べ、都構想などの戦いで完全に決着付けたいと語った。

ダブル選をめぐっては、自民は知事選で元大阪府副知事の小西禎一氏（67）を擁立し、1日に推薦を決定。市長選で柳本氏の擁立が決後、同党が固まった統一だ。

また、公明府本部は維新と対決する方針を固めた。公明は11年と15年の知事・市長ダブル選では維新に配慮し推薦せず自主投票にした。今回は維新との対決姿勢を鮮明にしたが、党本部とは別に「難」と地元の府本部推薦とする。（川岸、坂本純也）

そして「昔だって奇策が成功するとはかぎらなかった。…民意を甘く見るとならば、しっぺ返しはありうる」と。それから 1 週間。曲折はあったが、15 日朝刊 1 面のように「大阪ダブル選 固まる」とあいなった。

「大阪都構想」なるものを看板に掲げた維新の会が 2010 年に誕生してから 9 年になる。大阪に転居して、維新政治の酷さを実感するようになった。「脱法的な行為」とまで指摘された入れ替えダブル選で、なんとか維新政治を終わらせたいものだ。

（2019 年 3 月 16 日）